



# 加藤内科 広報新聞



寒さが厳しくなってきましたが、いかがお過ごしでしょうか。  
年末に向け、気忙しい毎日かと思いますが  
体調をくずされませんよう、お身体にはお気を付けください。

風邪をひき、咳が止まらない…結構日がたつのに咳が長引いている…

という方は、“喘息性気管支炎”にご注意ください。

## 喘息性気管支炎とは？

気管支炎の一種です。

風邪のウイルスなどの病原体が感染して、気管支炎を起こし、気管支の粘膜が腫れます。  
粘膜が腫れ、細くなった部分を通して呼吸をするので、空気が通る時にゼイゼイやヒーヒーという音が聞こえます。これは気管支喘息と同様の音ですので、この名前が付けられています。  
分泌液が多くなり痰となり、咳をして体外に出そうとするため、咳症状が目立つのも特徴です。

## 原因は？

原因の8割以上が、かぜ症候群の病原体であるウイルスや細菌、マイコプラズマやクラミジアといった病原体の感染がきっかけとなります。

また、何らかのアレルギーをお持ちの方が発症しやすいと考えられています。

上記以外にも、喫煙・大気汚染・化学物質なども挙げられます。

## 治療法は？

原因となる細菌を抗生剤でなくす。

ウイルスに対する特效薬はないため、症状に対するお薬を服用する。

安静にして、水分をしっかり摂る。

(脱水になると、痰が出にくく切れにくくなるため)。

吸入薬を使用する。



## 予防法は？

風邪がきっかけで、発症する機会が多いので、風邪をひかないように気をつけましょう。  
のどが渇いていたり、脱水になると痰が出にくく切れにくくなるので、水分をこまめに摂りましょう。  
気管が過敏になっていると、乾燥や温度の変化で症状が現れやすいので、加湿適温を心掛けましょう。  
吸入薬を処方された場合は、予防にもなるため症状が治まっても吸入薬を勝手に中止せず、  
使用しましょう。

## 吸入薬について

治療にも予防にも使われる吸入薬についてもう少し詳しく説明させていただきます。

吸入薬は、その名の通り薬剤を吸い込んで使用します。吸い込んだ薬は直接気道・肺に届きます。  
これは、喘息性気管支炎の治療にとって、とても理にかなっている治療法です。  
また、直接気道や肺に届けるため、内服に比べて投与量も少なく、全身性の副作用がほとんどない  
のも特徴の1つです。

吸入薬には、咳や発作が出た時に使用するものと、咳や発作が出なくても毎日使用するものの2種類が  
ありますが、最近では毎日使用するものが主流となってきています。  
咳や発作が出る度に、気管支は傷つきます。また、咳や発作が出る度に症状も重くなっていく傾向に  
あるため、症状が出る前に予防として使う方が良いとされているからです。

風邪は治ったから…咳が止まったから…最近発作が出ていないし…と、  
吸入をやめてしまいがちですが、治ったと思っていてもまだ完治していない場合は、ぶり返す可能性  
があります。また、気管支炎から喘息性気管支炎へ、更に気管支喘息→慢性閉塞性肺疾患へと進行して  
いく危険性があります。

ぶり返さないためにも、今後咳や発作を起こさない予防のためにも、  
吸入は必ず医師の指示に従い、継続して使用しましょう。

